

令和元年6月21日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02355

研究課題名(和文) 太平洋におけるディアスポラ文学 オーストラリアとニュージーランドの場合

研究課題名(英文) The diaspora in Australian and New Zealand Literature

研究代表者

三神 和子 (Mikami, Yasuko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：90134171

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、母国を離れて生きる「ディアスポラ」の人々にとってをのアイデンティティの確立の問題を取り上げ、この追及が母国(ホーム)やエスニシティとどのようにかかっているのかを両国の文学作品を通して研究した。文学作品においてもそれを主題に取り上げている作家が複数いる。このとき、アイデンティティの追求が国家(ホーム)やエスニシティと関係が無いとする作家もいるが、ニュージーランドで、アイデンティティの追求が国家(ホーム)やエスニシティと密接に関わっていると考える作家がいる。これらの作家の活動時期が、ニュージーランドの国家としてのアイデンティティ確立願望の時期と重なることが判る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

母国を離れて生きる「ディアスポラ」の人々は、どのように自分のアイデンティティを確立しているのだろうか？アイデンティティの追求が母国(ホーム)や民族、エスニシティと深くかかわることは、よくあることである。

しかしながら、この「ディアスポラ」とアイデンティティ確立の問題は1980年代以後複雑になってきた。移民や難民といった人々のグローバルな移動が激しくなり、国境という枠組みに呪縛されない人々が増加し、また、ハイブリッド化が進んだ地域が以前より多く見られるようになった。この複雑化の中、この問題を考えることは人間と共同体のかかわり方の問題を解く鍵を示そう。

研究成果の概要(英文)： This study has explored how the diaspora established thier identity by analyzing the Austraiian and New Zealand fiction. Through the study, we can find out two types. One is the people who do not believe the notion of nation (home) and ethnicity, considering that they are no more than the illusion made by the winner or the ruler of the nation, and do not depend on nation and ethnicity to establish thier identity. The other is those who depend on the nation and thnicity by remaking them new one compounded of multi racial and cultural people to establish thier identity. This type of writers are active in their writing activity when thier nation is desiring to be independent from England and to establish its identity as a nation.

研究分野：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ディアスポラ オーストラリア ニュージーランド アイデンティティ 移民 ハイブリッド 多文化 文学作品

## 1. 研究開始当初の背景

母国を離れて生きる「ディアスポラ」の人々にとって、アイデンティティーの確立の問題と母国(ホーム)はどのようにかかわっているのであろう。古今東西を問わず、文学においてアイデンティティーの追求は永遠のテーマであり、そのとき母国(ホーム)や民族、エスニシティーが深くかかわることは、よくあることである。「ディアスポラ」の人々にとって、「自分は何者であるのか?」「自分はどのように生きればよいのか?」「自分らしさとは何か?」を考えるとき、離れてきた母国(ホーム)、民族集団、エスニシティー、言語は、その喪失感とともに希求されてきた。自分が離国してきたわけではなく、祖先が離国した場合でも、同じように、希求された。もちろん、この「ディアスポラ」の人々の中には、旧植民地において、同国内で、祖先の土地を奪われ、伝統的な生活の場や生活習慣、言語を喪失した先住民もいる。彼らもまた「祖国」とともにアイデンティティーを喪失し、新たな模索を強いられた人々である。

しかしながら、この「ディアスポラ」とアイデンティティー確立の問題は1980年代以後複雑になってきた。経済や情報のグローバル化はもとより、移民や難民といった人々のグローバルな移動が激しくなり、国境という枠組みに呪縛されない人々が増加し、また、ハイブリッド化が進んだ地域が以前より多く見られるようになった。この複雑化の中、祖国はどのような位置を占めるのだろうか。アイデンティティーそのものが、そして、「ディアスポラ」という概念そのものが揺らいでいるのであろうか? 社会学的な統計では表わされない人間の心の奥の心情や願望を扱う文学というジャンルにおいて、これらの問題はより適切な表現の場を与えられていると考えられる。

この問題を考えるにあたって、オーストラリアとニュージーランドを対象として選んだ。両国とも、もちろん相違はあるものの、共通して、旧宗主国イギリスの民族、文化、言語を継受し、長い間イギリスと「一心同体」の意識を持っていたものの、南太平洋という地理的状況、経済的要因、近隣の諸国との関係などから、旧宗主国から心理的距離を置き始め、また、移民の増加、先住民問題、そしてハイブリッド化などから、自国内部の問題を抱え始め、一つの国としてのアイデンティティーの確立に苦心してきた。「ディアスポラ」であること・あったことは、両国の諸問題にとって根幹をなしているといえよう。特にニュージーランドはオーストラリアよりも長期にわたってイギリスと一体感が強く、イギリスを「母国」と捉えていたことから、イギリスと「一体」という幻想から目覚めた後の喪失感は強く、イギリスにルーツを持つ白人たちの「ディアスポラ」感は強かった。また、ニュージーランドのマオリの人々が英語で文学を紡ぎだし、自分たちの苦悩や希望を世に知らせ始め、ニュージーランドに生きる者たちのアイデンティティー探求は一気に加速される。ニュージーランド人作家がどのように「母国」を捉えたのか・捉えなおしたのか?どこにアイデンティティーを得たのか・どのようにアイデンティティーを捉えなおしたのか?短期間のうちにより濃厚にこれらの問題が語られていると期待された。文学作品の中に「ディアスポラ」であることと人間が生きることの関係が浮かび上がって来ると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、多文化・ハイブリッド化された社会において人間はどのようにアイデンティティーを確立すればよいのか?そのとき母国、民族、エスニシティー、言語はどのように関わっているのか?あるいは、国や民族アイデンティティーという呪縛から人は解放されるのか?という問題を、文学作品の中に描かれた「ディアスポラ」の人々の苦悩や願望を、さらに、「ディアスポラ」の状況にある作家の作品を読み解くことをとおして分析し、解明することである。

## 3. 研究の方法

文学の中でもフィクションを対象とし、ニュージーランド文学、とくにキャサリン・マンズフィールド、マオリ作家から、ケリー・ヒューム、パトリシア・グレイスを三神が担当した。オーストラリア文学では、パトリック・ホワイト、リチャード・フラナガン、ローザ・ブレイド、パメラ・トラバースを加藤が、ジョン・マクスウェル・クツェーを大場が担当した。各自が担当作家の作品を読み進み、分析し、研究会、学会及び学会誌、大学の紀要で研究成果を発表、共有しあった。とくに、『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』の制作段階においては、互いの執筆内容を検討しあい、分析を深めた。

## 4. 研究成果

(1) キャサリン・マンズフィールド、すなわち、自ら離国し、ディアスポラになった作家においては、次のことがわかった。彼女は宗主国イギリスに「一体感」を感じ、自分をイギリス人と思ってきた。しかしイギリスに於いて差別を受け、自分がイギリスに帰属しないことを知り、しばらくはディアスポラの状態を楽しんでいたが、弟がニュージーランドからやって来たことをきっかけに、ディアスポラの状態に苦しみはじめ、故郷を渴望し、自分がニュージーランド人で、ニュージーランドに帰属するという意識を持ち、ニュージーランドを書くことで、自分のアイデンティティーを保つようになる。しかし、このときの故国(ホーム)ニュージーランドは現実のありのままのニュージーランドではなく、彼女が勝手に理想化した故国である。彼女の場合、現実の物ではなく、理想化されたものであっても、故郷(ホーム)なくして、アイデンティティ

ーを保つことは出来ない。一時期、ディアスポラとして、自分がどこにも属さず、コスモポリタンであることを謳歌した時期があっただけに、この故郷への帰属は意味深い。

(2)マオリ作家、強制的に植民者によって自分たちの土地、エスニシティー、言語を奪われ、ディアスポラとなった人々の場合は次のとおりである。彼等は1970年代の以降、英語で自分たちの思いを語り出す。彼等は文学に於いて自分たちの民族の誇りの取り戻しやエスニシティーへの回帰を語り、仲間への誘いを呼びかける。しかしながら、彼等は白人(パケハ)からの分離独立を目指そうとはしない。ケリー・ヒュームの『ボーン・ピープラー』(1984年)に表されるように、パケハと一体になった新しいニュージーランドを新生し、その新生ニュージーランドを故郷(ホーム)として捉えたいと思うのだ。この作品の主人公3人(8分の1マオリのケレウィン、4分の1イギリス人の血が入っているマオリのジョー、アイルランド人のこどもサイモン)は、故郷(ホーム)を求めて、それぞれが旅に出かけると同時に自己のアイデンティティーを探求し、この新しい故郷(ホーム)を発見すると同時に、自分のアイデンティティーを確立する。ケリー・ヒュームにおいて、アイデンティティーと故郷(ホーム)は切り離せない。

さらにハイブリッド化が進んだニュージーランドにおいては、パトリシア・グレイスの『チャッピー』(2015年)に表れているように、故郷(ホーム)はそれほどこだわられていない。大切に思われているのは、エスニシティー、民族の誇りである。複雑なハイブリッドの主人公は地図上の住居においては、コスモポリタンに暮らしている。デンマーク人を父に、マオリ人を母に持つ主人公21歳のダニエルはスイスに暮らしているが、ドイツ文学を専攻しているものの、自分が何者かわからなくなり、とうとう自暴自棄になって、祖母のいるニュージーランドに送られる。そこで祖母の語る祖母の過去の物語を聞き、叔父の語る叔父の過去の物語を聞き、祖父が日本人だと知り、その祖父の物語を二人の物語からつなぎあわせる。祖父チャッピーがニュージーランドに漂流し(密入国し)、祖母と出会い、その後戦争のせいでニュージーランドを離れ、アジアやハワイを渡って、やっと祖母のいるニュージーランドに戻る過程、すなわちチャッピーがディアスポラとして生きた過程が描かれている。このとき、チャッピーが心の安らぎを得たもの、つまり、自分を見失わずに自分らしさを保てたものは日本の竹細工や庭園といった文化であり、アイデンティティーが母国のエスニシティーによって保たれていることがわかる。また、孫にあたるダニエルが自分のルーツを知り、日本に行ってみようと思うところで物語は終わるが、ダニエルも自分のルーツのエスニシティーを取り入れようとするとき、精神的に立ち直れる。ハイブリッド化が進んだときこそ、人はアイデンティティーが必要であり、そのより所はエスニシティーだと、パトリシア・グレイスは言う。

どちらの作家においても、そして、マオリの作家において、彼等は英語に自分たちの言語をアルファベットで表記し、混ぜ入れる。英語の幅を広げ、新しい英語を、新しいニュージーランド英語を創造しようとしている。

(3)このニュージーランドの作家たちの一方で、従来の「アイデンティティー」というものに疑問を投げかける作家もいる。その一人がオーストラリア在住のJ・M・クツェーで、彼は南アフリカ共和国出身、イギリス、アメリカで働いたあと、2002年にオーストラリアに移住した。2006年にはオーストラリアの市民権を獲得した。彼は従来の「アイデンティティー」がより所にしてきた歴史、国家、エスニシティーを勝者や支配者等による「語り」によって作られた実体的なものと考え、彼がオーストラリアに移住したすぐ後の作品、『エリザベス・コストロ』(2003年)ではオーストラリア人作家が主人公になっているものの、オーストラリアは具体的に描かれておらず、また、『遅い男』(2005年)では、オーストラリアに物語が設定されているものの、移民の主人公にはどこにも帰属意識がなく、歴史、国家、エスニシティーの獲得や回帰へと帰結する従来の「アイデンティティー」探求は意味のないものとなっている。しかしながら、クツェーがアイデンティティー探求をあきらめたわけではない。

以上のように、「ディアスポラ」の人々にとってアイデンティティーの確立は、国家(ホーム)やエスニシティーと関係が無いとする作家もいるが、(2)で述べたように、ニュージーランドで、アイデンティティーの追求が国家(ホーム)やエスニシティーと密接に関わっていると考える作家がいることは、ニュージーランドの国家としてのアイデンティティー確立願望の時期に、調査分析した作家たちの活躍時期が重なるからであろうと思われる。ナショナリズムの高まりとアイデンティティー確立との関係について考察することも試みたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7件)

三神和子：「キャサリン・マンスフィールドのニュージーランド像」『南半球評論』32巻，2017年5-21.

三神和子：「肉食とヴェジタリアニズム：キャサリン・マンスフィールドの『ドイツの宿にて』」『日本女子大学紀要 文学部』66巻2017，59-69.

有満保江：”Richard Flanagan’s *The Narrow Road to the Deep North* and Matsuo Basho’ *Okuno Hosomichi*” Coolabah 21 2017, 6-23.

加藤めぐみ：Testimony of War: Australian Memoirs and Fiction of the Pacific War ” *Life Writing* 14, 2017.475-484.

加藤めぐみ：「ポストコロニアル文学の社会的機能：オーストラリア先住民と和解文学の場合」『南半球評論』31巻、2016年、13 - 22 .

加藤めぐみ：“A Guide to Berlin by Gail Jones” 『南半球評論』31巻、2016年、81 - 83 .

大場久恵：「女性の物語として読む Diary of a Bad Year」『南半球評論』31巻、2016年、23 - 39 .

〔研究発表〕(計 13件)

三神和子：「Katherine Mansfield におけるニュージーランドに寄せる思い」大学院英文学専攻課程協議会、2018年。

有満保江：“The Evasion of Subjectivity in J.M.Coetzee's *Slow Man* and Patrick White's *Memoirs of Many in One*” (The CISLE Conference 2018, "Transcending Boundaries: Migrations, Dislocations and Literary Transformations." The Centre of the International Study of Literatures in English, 2018.

有満保江：“The Challenges of Doing Cultural Studies Today” International Academic Forum, 2017.

加藤めぐみ：「1988年をふりかえる 入植200周年以降の先住民・非先住民関係 文学の視点から」コメント。オーストラリア学会第29回全国研究大会、2018年

加藤めぐみ：“Connectivity in Literature: Australia-China-Japan” FASIC, 2017.

三神和子：「マオリとパケハの共生を願って Keri Hulme の先駆者として Katharine Mansfield」オーストラリア・ニュージーランド文学会秋大会、2016年。

有満保江：“Richard Flanagan's *The Narrow Road to the Deep North* and Matuo Bashou' *Okuno Hosomichi*” International Conference, “Go Between in Between Borders of Belonging” 2016.

有満保江：“Disappearance of Subjectivity in Patrick White's Later Novels” International Australian Studies Association. 2016.

有満保江：「英国圏文学の中のオーストラリア文学」就実大学英文学会、2016年。

有満保江：“The Moon above Our Heads: Stories of Courage” Cutin's Center for Human Right 2016.

加藤めぐみ：“Literature and responsibility: Letting Voices of Asylum/Non-asylum Seekers be heard in Contemporary Australian Literature” International Australian Studies Association. 2016.

加藤めぐみ：「ポストコロニアル文学の社会的機能：オーストラリア先住民と和解文学の場合」オーストラリア・ニュージーランド文学会秋大会、2015年。

加藤めぐみ：“Testimony of War: Memoirs and Fiction of the Pacific War” The Inaugural Conference for the IABA--Asia-Pacific Chapter 2015

〔図書〕(計 10件)

加藤めぐみ：共著 『文明と身体』牛村圭 編 第10章「身体のない他者・身体をもつ他者 オーストラリア文学における日本人描写の変遷」臨川書店、2018年 259 - 288

加藤めぐみ：翻訳 アン＝マリー・ジョーデンス著 『希望 オーストラリアにきた難民と支援者の語り 多文化国家の難民受け入れと定住の歴史』明石書店 2018年。

加藤めぐみ：翻訳 ヘレン・ガーナー著 『グリーン ある殺人事件裁判の物語』現代企

画室、2018年。

三神和子：『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』彩流社、2017、105 - 131 , 181 - 204 .

加藤めぐみ：『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』彩流社、2017、53 - 74 .

大場久恵：『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』彩流社、2017、77 - 100 .

三神和子：『文芸礼賛』大阪教育出版、2016年、821 - 830 .

有満保江：『Literature in English: New Frontiers in Research』Stauffenburg Verlag、2016、43 - 53 .

加藤めぐみ：『海峡を越える人びとー真珠とナマコとアラフラ海』コモンズ、2016、203 - 224 .

有満保江：『Contemporary Australian Studies: Literature, Film and Media Studies in a Globalizing Age』Otowa-Shobou Tsurumi-Shoten、2016、67-93.

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究分担者

研究分担者氏名：有満 保江

ローマ字氏名：(ARIMITU, Yasue)

所属研究機関名：大妻女子大学短期大学部

部局名：英文科

職名：教授

研究者番号（8桁）：20097075

研究分担者氏名：加藤 めぐみ

ローマ字氏名：(KATOU, Megumi)

所属研究機関名：明星大学

部局名：人文学部

職名：教授

研究者番号：30247168

研究分担者氏名：大場 久恵  
ローマ字氏名：(OBA, Hisae)  
所属研究機関名：日本女子大学  
部局名：文学部  
職名：研究員  
研究者番号：20409270

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。